

歴史授業を創る

兵庫県立国際高等学校教頭
陶山 浩

1. はじめに

(1)学校教育とは裏腹に…

NHK「歴史秘話ヒストリア」はおもしろい。その前番組「その時歴史が動いた」もこれまたおもしろかった。歴史ブームの影響なのか、各地で開催されている通称“現説”（現地説明会）は超満員の人気ぶりである。博物館や公民館などが行う歴史ツアーも先着順で即完了の盛況ぶりである。それに反してとはいわないまでも、学校教育での歴史に対する生徒の反応は、そのレベルに達していないのではなかろうか。それは何に起因しているのでしょうか。

(2)歴史教育への応用

上記で紹介したものに共通する要素は、①その時々、②話題性のある過去の出来事③現在と比較して、④他国・他地域の人々の視点やエピソードを参照しながら、⑤多様なメディアを使って楽しく学ぶ、という要素が考えられる。体験的思考によって、歴史の楽しみを発見し、次への行動につながる。学校教育における歴史学習では、そのことができていだろうか？

その現状を分析し、少しでも歴史的思考力の思考ツールを持ち合わせた生徒を育成することが歴史教育者に課せられた責務ではなかろうか。

そこで、本稿では「歴史は変化するもの」という認識の立場にたち、固定化された歴史的知識の伝授からどのように脱却するかに対する私心を提案することにする。

2. 歴史像創造にいたるプロセス追究

(1)新発見で変わる歴史

歴史学は、新しい史料が発見されることによって従来の史実が覆ることがしばしば起こってくる。高等学校教科書レベルでも、日本最古の貨幣「和同開珎」が7世紀後半に「富本銭」が鑄造されたという記述に変更が行われている。考古学上に特に多く、新たな発掘調査によって、従来の理論の変更が迫られる場合がある。そこに歴史のロマンを感じる人が

いたり、暗記した歴史事象が意味をなさないことを危惧する人がいる。特に、歴史教育者の中に後者の考えをもっている人が一部いるかもしれない。しかし、「歴史は変化するもの」ということは周知の通りであり、歴史事象は暗記して固定化するものであったら、学問として成り立たないことになることは歴史教育者ならば心得ているものと思われる。そこへの意識改革を行えば、どのように歴史が組み立てられているかにシフトした歴史授業が構築できるのではなかろうか。

(2)当時の名称で変わる歴史

現代人は、現代の環境の下で歴史の世界を考える場合がある。しかし、歴史の世界は歴史の環境で考えるのが当然である。例えば、浮世絵師の「歌川広重」を従来「安藤広重」と教えていた時代があった。ご存じの通り、歌川広重は歌川豊広に入門し、ゴッホやモネなどの画家に影響を与え、世界的に著名な画家である。従来は、安藤広重と呼ばれ、江戸の定火消しの安藤家に生まれ、その後浮世絵師となって、広重という号をもらったので、両者を組み合わせさせてそう呼んでいた。しかし、本人もそう名乗ったことはなく、不適切だということで現在は歌川広重となっている。歴史事象を考える場合、歴史事象が置かれた環境下で考察するということを認識させる事例といえる。

(3)立場の変更で変わる歴史

歴史事象は、必ず多面的に考察する必要がある。歴史上の人物については、特にそのことがいえる。例えば平清盛については、3つの側面から描かれることが多い。①武士としての清盛、②貴族としての清盛、③出家後の清盛である。そのうち、『平家物語』によって形づくられた「先平相国入道清盛」と称される専制者としてのイメージが長く一般的に流布してきた。平家物語では清盛の悪行として、①殿下乗合、②後白河法皇の鳥羽殿幽閉、③都遷し、④南都焼き討ちの4つをあげている。これら4つの悪行は

全てこの出家後の時期に行われている。しかし、最近の研究成果に基づいて、平清盛の評価は武士の世の中を切り開いた先駆者として、見直されつつある。東アジアにつながる国際都市福原の建設の壮大な構想もその一つといえる。

また、鎌倉時代から室町時代への過程を描いたものに『梅松論』と『神皇正統記』がある。両作品は筆者の拠る立場が違うために描かれた歴史像は異なるものとなっている。『梅松論』は、足利尊氏の側近とも夢窓疎石に関係の深い僧侶とも推量されている者による作品である。鎌倉幕府の治績から足利尊氏が政権を掌握するまでの過程を、足利氏による室町幕府創立の正当性を主張する視点から描いている。

『神皇正統記』は、南北朝時代に公卿の北畠親房が、幼帝後村上天皇のために、吉野朝廷(いわゆる南朝)の正統性を述べた歴史書である。

(4)事実確認ができないため変わる歴史

世界最大の墓(墓域面積)と称される従来「仁徳天皇陵」と呼ばれた墳墓は、最近の研究成果によって「大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)」と教科書に掲載されている。百舌鳥耳原中陵の陵号が与えられており、一般的には仁徳天皇陵と呼ばれる。陵墓参考地は宮内庁管轄で、墳墓内の調査はできないため、被葬者を確定することは難しい。そのため、形状を現す大山・大仙、被葬者を表す仁徳、これに続けるものに学術的な古墳、陵墓としての陵・天皇陵・御陵・帝陵と多数の組み合わせが生じている。よって、教科書のレベルでは地名+文化財名(通称呼称)の表記でおさめている。

(5)新解釈で変わる歴史

「解釈によって、はじめて史実は意味をもつ」といわれるように、歴史学では認識した史実に意味を与え、他の史実と関連させ、その上で、まとまったイメージである「歴史像」を描くことが行われ、その解釈で歴史像が変化することがある。

従来は中世とは、古代の腐敗した貴族や大寺社勢力を、虐げられていた地方武士が圧倒した時代と思われていた。しかし最近の研究成果で、鎌倉時代は朝廷も西日本を支配し、大寺社は鎌倉仏教の影響があるものの勢力を持ち続ける。その中で中世とは権力が分立した時代ではないかという考えが広まり、律令が崩壊し、権力が分立した院政期から中世と見るようになった。時代区分論争があるものの、教科

書レベルで中世については、院政期以降を指すようになってきている。

3. 素材の教材化

素材を教材化する場合の視点は、大きく分けると、a. 現代の社会がわかるものであること、b. 生徒たちの探究活動を誘発するもの、c. 歴史教育の目標の範囲であること、である。歴史教育の目標について、留意することは、①現在の社会は、どのような歴史的特色を持っているのか(歴史的现状把握)、②われわれはどこへ行こうとしているのか(歴史的未來志向)、③自分たちの生活体験と遊離しない形で歴史理解(現代問題解決型歴史理解)、④現在、こうなっているのはどの時代からなのか、⑤なぜ、歴史的事象は起こったのか(因果関係の思考)、⑥どんなことを考えてそうしたのか(歴史的意思決定)、⑦本当の問題は何かである。

(1)地域素材の教材化

多くの学習支援者が行っているのが、この教材化だろう。主な理由としては、①身近な地域には発掘できる地域素材が存在している。②学習支援者自ら歴史学等研究者と同じ研究プロセスを体験することによって教材化を試みることができる。③生徒にも同様の体験が可能である。以上のような理由から実践されている場合が多い。ただ、留意しなければならない点がある。①地域素材に対する構えである。地域素材を絶対視し、生徒にお国自慢的に伝授することがあってはならない。歴史学の科学性にしたがい、客観性を重視した立場を取る必要がある。②地域素材については、小学校第3・4学年の内容に「(5)地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする」とある。どちらかという心情的なものをくみ取る内容構成となるので、高等学校での内容構成に配慮する必要がある。

(2)絵画資料の教材化

日本史Bの学習指導要領の内容冒頭部分で、現行の大項目「(1) 歴史の考察」がなくなり、「(1)ア 歴史と資料」、「(2)ア 歴史の解釈」、「(3)ア 歴史の説明」、「(6)ウ 歴史の論述」が追加された。資料活用能力が重視されていることがわかる。その中でも絵画資料の活用が望まれるところである。従来の授

業構成では、歴史事象を学習支援者が説明するために資料が補足的に活用された。抽象的な用語をモデル図で認識したり、戦乱の臨場観を想像図でイメージしたり、文献史料で内容を確認する時に活用した。

生徒が様々な情報を獲得し、最終的に合理的意志決定をすることが求められる。それでは、授業構成上どのような授業過程を仕組むことが合理的意志決定の能力を育成することになるのだろうか。S.H.Engleの学説を基に5つのプロセス①情報の吟味、②情報の検討、③情報の収集、④情報の検証、⑤合理的意志決定、を提案したい。①では、生徒は主体的に情報に関与することが要求される。つまり、生徒たちにとって「切実な問題」が要求されるのである。さらに、情報に対して疑問や興味をもつことによって情報が吟味され、さらに生徒にとって切実性が強化されるのである。②では、問題を探究する場合、主張を根拠づける情報とそれに反対する情報を用いて主張を検討する必要がある。③では、さまざまな情報を収集し、どの情報が最も有効か明らかにする能力が必要になる。④では、主張を裏付ける根拠となる証拠の信憑性を検討し、自分の見解を強化する。⑤では、自分が正しいとする主張を吟味した方法を追試して再吟味を加え、最終的な議論の論点を明確にし、意志決定を行う。

絵画資料については、「源頼朝像」「平重盛像」「足利尊氏像」について、歴史学者の検証が行われ、学説が提供されている。まさに、絵画資料を素材に教材化する好例であろう。圧倒的に『一遍聖絵』（社会史）、『蒙古襲来絵詞』（政治史）を扱ったものが多い。

(3)モノの教材化

高等学校歴史教育では、「見えるモノから見えないもの」の読みとりが必要である。思考の具象化から抽象化の発達段階である。モノについては、考古学上の遺物、建造物、美術工芸品、その他資料等が含まれる。建造物の場合、「なぜ、その場所に、その時代に、誰によって、その様式のモノが建てられたのか」を問うことによって歴史を考察することができる。具体的なモノを観察・分析することによって、抽象的な概念へ向かう思考が展開される。例えば、古墳時代の埴輪から、地域による形式の相違、種類・用途の多様性等から当時の人びとの精神性及び権力者に対する畏敬等を考察する素材となる。

(4)同時代史的教材化

歴史授業の展開は、政治史を中心に行った後、国際関係史、経済史、文化思想史という縦割りの学問の割拠主義が貫かれている。また、支配層の立場の視点で歴史事象を追究するスタンスで歴史教科書は内容構成されている。さらに、日本という空間内で収斂する視点で歴史事象をみている。

しかし、日本史の歴史事象は、従来の見方・考え方で理解できるものであろうか。同時代の政治家は、同時代の文化人に影響を受けたり、国際環境が政治を動かしたり、文化の変容が起こったりする。被支配者層からみた歴史は異なる歴史像を創り出すことになる。日本の地図を朝鮮半島側からみた場合、全く違った風景が広がってくる。九州や東北、北海道、沖縄等の視点に立った歴史像を教材化できれば思考のツールを増やすことになる。

(5)新解釈の教材化

「網野史観」に依拠した歴史像の再構成は、歴史教育に一石を投じることになる。例えば、百姓＝農民というイメージがある。しかし、百姓は身分を表す言葉で、農民は職業を表す言葉である。百姓と呼ばれる身分は、農民、山民、海民等が含まれ、農民だけではなく商業や手工業などの多様な生業の従事者であった。

「孤立した島国」という日本像で、歴史像を創造したために、国風文化や鎖国というイメージが形成され、島国根性等の派生した観念が生まれた。実際は日本が「列島」であり、周辺の海を通じて多くの人や物がたえず列島に出入りしていた。

また、「日本」という国号について、使用時期がいつかについて見直しが必要である。実際は「日本」という国号が七世紀末、689年に実行された飛鳥浄御原令によって定まったとされる。対外的にも702年の遣唐使粟田真人が「日本」を使用している。

4. おわりに

歴史授業を創るということは、固定化された歴史事象を伝授するという考えでは成り立たないといえる。生徒が歴史像を創り、歴史観を形成することができれば、歴史的思考力を育成することができたといえる。歴史教育に関わる学習支援者は、日々その目標をめざして教材化に努めている。素材の教材化が年間に何回かでも実現できれば、歴史教育に貢献できたといえるのではなかろうか。